

恐るべき「モラル・ハザード」

4月25日、日産生命保険が事実上倒産した。当局の業務停止命令を受け清算手続きに入ったことで、日本の保険会社もいよいよ淘汰の時代に入ったことを内外に印象づけた。

しかし、日産生命の破綻はすでに時間の問題だった。ビッグ・バンなどとは縁もない、単に資金調達とその運用に失敗した保険（金融）会社の末路を現すものであった。

私はこのニュースを聞いたとき、94年2月当時発信した「生保・その憂鬱」という小文を思い出した。バブル期の生保の無茶な資金調達（保険勧誘）と悪夢のような資金運用状況をレポートしたのだが、金融界では93年頃から「渋谷4社」などと問題生保の経営危機は折りに触れ話題になっていた。

だから日産生命の破綻は、むしろ「遅かった」との感じを受けたのが正直なところで、破綻そのものは当然と思った。

だが、日産生命社長の破綻説明の記者会見の記事を読んで驚いた。ちょっとひどすぎると思った。日産生命の社長といえば、おそらく金融界の名士で各種会合でも下にも置かれぬ扱いを受けているエスタブリッシュメントであろう。会社四季報によれば、従業員4,615人、保険料収入2,510億円で、業界では下位とはいえ、歴史もある名門のトップである。

そんな企業の社長の言を以下に再録してみる。

いつから債務超過なのか。

「最終赤字は今回が初めてだが、実質的には3年ほど前から債務超過だった。債務超過の内訳は……」

債券と株式の運用はどうだったのか。

「債券は含み益のあるものはほぼ売却済みだ。株式は一時は益が出ていたものの、相場の先行き見通しを誤り、マイナスになった」

大蔵省には報告していたのか。

「オフバランスを含めた全体の状況に関する資料を毎年報告してきた。資産内容の健全化が必要だということは指摘されたが、配当の継続についてはこちらからお願いしたこともあり、許可していただいた」

内部で事実上の債務超過がわかっていなが

ら公表せずに新規契約を続けたということか。「生命保険会社として契約高の増加が経営再建につながると考えた。契約者に対しては通常の決算報告をしていた」

決算の内情を隠しながら、新規契約を取っていた経営責任はどうするのか。

「無事に契約を包括移転させるのが経営責任だと考えている。……」

引用入力するのも気がひけるような内容だ。

要するに、「3年前から（本当はもっと前ではないか？）債務超過に陥って、事業存続が難しい状況でしたが、配当を継続すればその内なんとかなるだろうと当局とも相談しながら粉飾まがいの決算をやって新規保険を獲得してきました。しかし頼りの含み益も底を突き、終に万策つきました」ということだ。

恐るべきモラル・ハザード（倫理観の喪失）と言うべきだ。これが「保障を売る」保険業界のトップ・マネージメントの1人が言う言葉とすれば、誰もが暗澹とした気分させられるに違いない。

一連の銀行破綻のときもそうであったが、金融の破綻は投資・運用の失敗とそれを隠す作業で泥沼に陥って、時間稼ぎをしているうちに身動きがとれなくなって手をあげるパターンが多い。

当局と二人三脚持ちつ持たれつやってきた時代があまりにも長かったために、モラルに対する感覚が全く鈍ってしまったに違いない。

それにしても当局の黙認という対応もひどい。93年当時から債務超過を知っていながら営業を継続させ、新規の契約を結ばせていた。契約顧客こそいい面の皮である。

これから日本版ビッグ・バンが始まるというが、野村証券の不祥事といい、今回の生保破綻といい不透明な金融を排除することが先決である。それなくして、日本の金融が世界の金融に太刀打ちすることは不可能だ。正に、待った無しの改革が求められている。

§「中元資金」受付開始§

恒例の中小企業向け「中元資金」は今月15日より7月末まで受付。限度額1,000万円、金利1.8%（別途保証料要）。県が金融機関に預託することで融資枠は567億円確保。